The Acarological Society of Japan

correlated with the vector population densities (r=0.87).

4) Infection rate of the chigger mites to *R. tsutsugamushi* by means of IFA test showed 0.69% (3/436) in *L. pallidum*, 0.8% to *L. scutellare* (7/854) and 0.45% (1/220) in *L. orientale*.

雲仙・普賢岳に於ける噴火前と噴火後4年目の恙虫と野鼠類の比較 鈴木 博（長崎大・熱研）── 1990年11月17日，雲仙・普賢岳が噴火し現在も活動している。普賢岳の標高700～800 m の地域で，噴火前と噴火後4年目の恙虫とその主な宿主である野鼠類を調査した。噴火前には野鼠類2属3種を，噴火後には3属3種を得た。この結果，噴火前後に野鼠類の数に差は認められなかった。恙虫は宿主から，噴火前6属12種，噴火後4属8種で噴火後2属4種が採集されなかった。土壌中からの直接採集法では噴火前8属19種，噴火後7属14種で，1属5種の恙虫が噴火後には採集されなかった。採集個体数も1種を除き噴火後の方が減少していた。

シュルツェマダニに媒介されたライム病の長野県伊那地方初症例 鳥山治康（鳥山整形）・高本雅哉・内川公人（信州大・医・寄生虫）── 症例：主婦，55歳。1994年6月28日に長野県下伊那郡大鹿村二児山（標高約1,800 m）で山菜採りをして右上腕部をシュルツェマダニ（雌）に刺咬される。2日後，家人がダニをむしり取ったが，口器の一部残存を訴え，寄生虫体を携えて来院。口器残存部除去後，7月16日にダニ咬着部に軽度の痒みと熱感を伴う経約5 cm の円形紅斑が出現，全身の強い倦怠感と頭痛を訴えた。二次感染と考えて塩酸ロメフロキサンを投与したが，紅斑は次第に増大した。7月28日には自発痛と運動時痛を伴う激しい右肩関節痛を発現。ライム病を疑って8月3日に採血とダニ刺咬部の皮膚試験切除を行い，塩酸ミノサイクリンの投与を開始した。血清は抗ライム病菌抗体陽性（MCAT，有光による）で，皮膚組織からはボレリアが分離された（MTU株）。また，ミノサイクリンの3週間投与で治癒をみた。以上から，本症例はライム病と診断され，上記の症状は本症に伴ったものと見なされた。

長野県下では遊走性紅斑の症例がこれまでに30余り知られているが，本症例は伊那地方からの初症例である。

ハダニ科の抗原性 井手 武（奈良医大・化学）・芦田恒雄（奈良医大・耳鼻科）・国松幹和（奈良医大・2内）・井上雅央・萩原敏弘（奈良農試）── 我々は第2回日本職業アレルギー学会で，ユズ栽培及び集荷選別作業従事者にみられたミカンハダニアレルギーを報告した。（日本職業アレルギー学会誌 2(1) 14, 1994）

今回は，ハダニ科（ミカンハダニ，カンザワハダニ）とヒョウヒダニ属（コナヒョウヒダニ，ヤケヒョウヒダニ）との共通抗原性を後者の精製アレルゲン及び虫体で作成したウサギ抗体（6種，国立相模原病院安枝浩先生恵与）を用いてSDS-PAGE/イムノブロット法により検討した。

これらのダニ間には，数種の共通抗原が認められた。特にミカンハダニとカンザワハダニ

NII-Electronic Library Service